

絵本と心理療法に関する一考察

教育学部 臨床心理学科 松瀬 喜治

はじめに

神話・童話等の物語に関する臨床心理学的研究は、ユング (Jung, C.G.) 派の臨床家を中心に多くの論述がある。神話・昔話の母胎が無意識であり、そのような無意識を普遍的無意識と名付けてその性質を明らかにしていったのがユングその人だから当然と言える。「無意識の発見」を著したアンリ・エレンベルガーは、力動心理学・精神医学の発展の歴史を述べたその最後の章で、「実験心理学の厳格な要請と無意識探求者の体験する心理的現実とを共に正当に扱える概念枠」を構築する可能性があるものとして、無意識の神話産生機能 (mythopoetic function - Meyers, F.) にあるという注目すべき提案をしている。この無意識の神話産生機能とは、「意識の閥下にある自己の中心領域であり、内面のロマンスの何とも不思議な制作がここで恒常的に行われている」。そしてそれによって無意識はたえず物語と神話を紡ぎだしているという。

心理療法を希望して来談する人は、何らかの意味でその意識の主体性や統合性を脅かされている人と言っても良いであろう。したがって、その意識の在り方を改変していくことが必要となるが、そのためにはその人の意識と無意識との関係をよく知り、また、それを調整していかなければならない。よって、カウンセラー・治療者は、その人の無意識の声に耳を傾けることにエネルギーを注ぐことになるのだが、それが深い層との関連になるほど「物語」の形をとってくると考えられる (河合, 2001)。「心理療法と物語」の関連については同一テーマで心理療法の講座が編集されるほど関心が高まっている

研究領域である。筆者の臨床経験をまとめた事例研究を振り返っても、クライアントが独自の物語を創造できるように援助してきたという実感がある。例えば、抜毛症児の箱庭表現では、「家族内ストレス（両親の離婚）を克服し新しい家族の建設という物語」(1988)が、強迫神経症者の夢表現では、「強迫症状の呪縛から脱却し sexual identity 形成の物語」(1989)が、青年期危機に陥っていた青年のロールシャッハ・テストでは、「境界例的パーソナリティの破綻と自己愛的癒しの物語」(1991)が、そして、精神分裂病者の描画表現を題材にした妄想の語りの中では、「迫害的侵襲に怯えながらも必死に生きていく物語」(1999)が、クライアントと治療者の関係を「器」として生々しく語られている。この他に、筆者が最近注目している物語に「絵本」がある。子育てに不安に悩んだり、不登校児を持つ母親が絵本を子どもに読み聞かせることを通して、子どもとの関係の修復に役だったり、子どもと筆者が手作り絵本を合作で創るという試みも続けている。

絵本と心理療法に関しては、まだ殆ど未開拓の領域であるので、本稿では、絵本の心理療法的理解を具体例を通して検討してみることにする。

あるばんマックスは おおかみの むいぐるみを きると、
いたずらをはじめて おおあばれ……
おかあさんは おこった。「このかいじゅう！」
マックスも まけずに「おまえをたべちゃうぞ！」
とうとう、マックスは ゆうごはんぬきで、
しんしつに ほうりこまれた。

Maurice Sendak (1963) : WHERE THE WILD THINGS ARE.
【神宮輝夫 訳 (1975) 富山房】

モーリス・センダックの代表的な作品『かいじゅうたちのいるところ』の冒頭の場面である。金槌とホークを持って大暴れしている主人公を見て「子どもがまねをするのではと心配……。幼い子を驚かさないだろうか。心理的に害を与えないだろうか」と感じる親も少なくないだろう。しかし、これらの大人の勝手な不安を、全世界の子どもたちは事もなげに吹き飛ばしてしまった。なぜこれ程までこの怪獣物語が子どもの心を虜にするのか。Leo Lionniの2作品（『フレデリック』『ペツェッティーノ』）と併せて、この三つの作品を素材として、語り継がれ続ける絵本の魅力について考察する。

ストーリー（物語）を読む

臨床心理学は、人の悩みの癒しに直接関わる実践学問領域であるから、当然子どもの悩みにも関係する。子どもは悩みを言葉で十分表現できないため、遊びを媒介とした心理療法すなわちプレイセラピーが行われるのが通例である。セラピストとの安定した治療関係というのは、現実の人間関係とは異なる非日常的な関係であり、社会から守られた治療空間が形成されることになる。したがって、その場面では、子どもの通常の現実とは異なる行動（普段はおとなしく抑制的な子が手のつけられない程乱暴になる等）やファンタジー・退行が促進されやすい。しかも、これらの遊びや、遊びに示されたファンタジーの流れには殆どの場合、ストーリー性があり、そのストーリーは、その子の持つ悩みと悩みの解決への流れを含んでいることが多い。（ここで敢えて物語ではなくてストーリーとしたのは、土居（1977）の精神科面接において、患者が時間的前後関係をおかまいなしに話されることの多いその内容を、時間の配列の中に捉えなおして、それを「ストーリーを読む」ように患者の話に耳を傾けなければ充分な「見立て」ができないという主張も重要と考えているからである。）

極論すれば、このストーリーをセラピストが読みとって共感できるか否かでそのプレイセラピーの成否が決まるようなところがある。

ここではまず最初に、マックス少年を一事例と捉えてストーリーの読み方の一つの仮説を空井（1991）を参考にして示してみることにする。

（1）マックス少年の事例

冒頭の場面から、クライアントの主訴等は下記のようになるであろう。

クライアント：マックス少年

主 訴：いたずら、動物虐待（疑い）、母親への反抗

見立て：マックスがいたずらをしたから、母親は怒った。その母に対して反抗したからこそ、罰として彼は夕食抜きで寝室に閉じこめられた。このように考えてみると、この物語はお母さんとの関係の在り方、信頼関係の在り方をテーマにしていることがわかる。子どもは親がどこまで自分を保護してくれるのか、また言いかえればどこまで許してくれるかに関心を示し、半ば無

意識的に親を試す。「何だか分からないけれどいたずらしたくなる」という形で表れる方が自然であろう。

夕食抜きと寝室に独り置き去りにされるということは二重の罰を与えられたことになる。マックスから見ると、自分を許さぬ母親、言いかえると母親の中にある恐ろしい“かいじゅう性”を見せつけられたことになるのである。本来、母はあたたかく優しく包んでくれる存在ではなかったのか？ 結局は、いたずらをしただけで厳罰を与える怪獣ではないか？ マックスの心の中では戦いが始まる。

ファンタジーへの旅立ち、そして、対決

すると、 しんしつに、 によきりによきりと きがはえだして、
どんどんはえて、 もっと もっとはえて てんじょうが
きのえだと はっぱに かくれると、 かべが きえて、
あたりは すっかり もりや のはら。
そこへ、 なみが ざぶり ざぶりと うちよせて
マックスの ふねを はこんできた。
マックスは ふねにのった。 よるも ひるもこうかいした。
いちねんと いちにち こうかいすると、 (ついたところが)
かいじゅうたちの いるところ。
マックスが りくちに ふねを つけると、 かいじゅうたちは
すごい こえで うおーっと ほえて、すごい はを がちがち
ならして、すごいめだまを ぎろぎろさせて、
すごい つめを むきだした。
とうとう、 マックスは はらをたてた。「しずかに しろ！」と
どなりつけた。
それから かいじゅうならしの まほうを つかった。……
かいじゅうたちは おそれいって、 こんなかかいじゅう
みたことない といって、 マックスを かいじゅうたちの
おうさまにした。

ファンタジーの世界に無事に没入することのできたマックスは、心の問題

にとりくむための船出をする。この心の航海は自分の問題に直面する旅でもあり、へたをすると自分を見失う危険が伴う冒険とも言える。それだけ大変な心の作業であることを示唆している。

心理療法と関連させれば、この怪獣との対決場面がクライマックスである。なぜなら対決（confrontation）しない限り、問題の解決はないと考えられるからである。

この怪獣達が何を象徴しているか。いろいろ連想されるが、最初の場面から考えるとやはり、マックスの心の中にある「母親のかいじゅう性」とみる方が妥当であろう。

マックスは勇気をもって、今まで自分を脅かしていた怪獣達と対決し勝利を得た。

怪獣との親和性

「では みんなのもの！」マックスは おおごえを はりあげた。

「かいじゅう おどりを はじめよう！」

怪獣達を征服したマックスは、王様になって満足したのではなく、怪獣踊りを始めるところが興味深い。はじめは月夜に踊り、昼間には木の枝にぶら下がり、次には怪獣踊りのまん中で小さな王様気分を味わっている。もし怪獣達を征服することだけが目的ならば王様になったところで物語は終わっても良いはずである。これらの怪獣達と楽しく遊んでいる様子から征服というより親しみを表現していることが理解される。

人は自分の心と相容れないもの（ego alien）があると、初めはそれを見ないようにする。

そのまま関わりが全くないままのものもあるが、多くの場合それでは解決しないので、対決する 때가やってくる。そこで、相容れないものとしてではなくて、親しみのある仲間（ego syntonic）として心の中に受け入れることになる。友人との人間関係が拗れた場合を想定してみるとわかりやすいであろう。この作業の繰り返しによって、人の心は育っていく。このプロセスはプレイセラピーや他の心理療法でも普通に見られる現象である。

ファンタジーの世界からの帰還

「もうたくさんだ。 やめい！」マックスは さげんだ。
ゆうごはん ぬきで かいじゅうたちを ねむらせた。
すると、 どうだろう、 マックスは おうさまなのに
さびしくなって、 やさしい だれかさんの ところに
かえりたくなった。……

「おねがい いかないで おれたちは、 たべちゃいたいほど
おまえが すきなんだ。 たべてやるから いかないで。」

「そんなの いやだ！」…… かいじゅうたちは……、
すごい めだまを ぎろろぎろろ させて、すごい つめを
むきだした。 しかし、 マックスは さっさと ふねに
のりこんで、 さよならと てをふった。

母親の中の怪獣性をファンタジーによって解決したマックスは、それを母の中の恐れる必要がなくなった。そうなる母親のもう一つの側面、つまりマックスを温かく支える方の側面が心の中に蘇ってきたのである。セラピストの感覚からすると、船出の時のマックスの表情とは対照的に、現実への帰還の旅での大きな仕事を成し遂げた後の安らかさと母への郷愁の二つが重なり、静かな感動を覚えるところであろう。

母の温かさの確認

いつのまにやら、 おかあさんに ほうりこまれた
じぶんのしんしつ。
ちゃんと ゆうごはんが おいてあって、 まだ ほかほかと
あたたかかった。

夕食抜きで寝室に放り込まれるという罰を受けたマックスであったが、夕ご飯が知らぬ間に置かれていて、しかもそれが温かかったことで、母がそこにいなくても母からの安心感を与えられたのであろう。もう独りぼっちではなくなっていたのである。

ところで、マックスと母親の心の動きを、テレビのホームドラマ（例、橋

田寿賀子が描く物語)に出てくる物語記述でも十分説明が付くと思われる向きもあるかもしれない。夕食抜きで閉じこめてしまった我が子に対して、少し時間がたって冷静に考えてみた母親は「酷いことをした。あんな事位でかっとなってキレてしまって。……もうそろそろ腹が減って目が覚める頃だろうから、そっと持って行ってあげようかね」と心あるお母さんならば思い直して、マックスの母と似たような行動を起こすことであろう。

マックスの方にしても、ある程度時間が経って怒りが収まってくると、「お母さんに対して何となくイライラしてあんないたずらをしてみたけど、自分自身に対して怒っていたのかも知れないかな。でも素直になるのもしゃくに障るし……」と思っている内に夢の中へ。いい匂いに誘われて目が覚めると、そこには温かい夕食がおかれていて、「やっぱりお母さんは僕のことを見捨ててはいなかった」。お母さんの愛に包まれ、マックスの目がジンワリと涙目になるというように、ドラマでは脚色されるかも知れない。

前述のごとくマックスをクライアントとみなし、本人がプレイの中で表現した彼自身の物語として辿ると、かいじゅうたちのいるところは見事な心理療法過程の表現といえることができる。そのことと上記の常識的な親子の心の変化とは矛盾はしない。なぜならば、ごく普通の親子間の心の動きの根底に流れているファンタジーの一仮説として物語を示したからである。

(2) ペテエッティーノの事例 ～自分を見つけた部分品の話～

かれのなまえは ペテエッティーノ。ほかの みんなは
 おおきくて おもいきったことも すばらしいことも
 いろいろできた。かれは ちいさくて きっと だれかの
 とる にたらない ぶぶんひんなんだと おもっていた。
 だれの ぶぶんひんなんだろう、とうとう あるひ かれは
 たしかめようと けっしんした。

主 訴：自分は小さな何もできない存在、誰かのとるに足らない部分品ではないか。

見立て：他の奴等は大きくて素晴らしく見えて、ペテエッティーノ自身は小さな何も出来ない存在のように思いこんでしまっている。自分の中に、いわ

ば欠陥（足りない部分）があり、そして、きっと誰か他のものの一部（one of them）だと感じてしまっている状態、すなわち、自己同一性の拡散状態（identity diffusion）にあると考えられる。

自分とは何か？

「もしもし、ぼくは きみの おぶんひんじゃ ないでしょうか？」

はしるやつに かれはきいた。

「おぶんひんが たりなくて はしれる はずないだろう？」

ちょっと びっくりして はしるやつは いった。……

およぐやつが うかびあがったとき、 ペテッティーノは

かれにも きいてみた。

「おぶんひんが たりなくて どうして およげる？」

およぐやつは そういって ふかいみずの そこへ

もどっていった。……

かれは とんでるやつにも きいた。こたえは いつも おんなじ。

テーマは自分探しであることは明らかで、それを確かめる旅に出ることになったのである。

似たような物語として、僕を探しにというビッグオーの冒険物語を挙げることができる。

学生に読み聞かせをした後に感想を尋ねてみると、「色がきれい」「抽象的なところが共感できる」「創造力が駆り立てられる」「冒険的なところが面白い」など肯定的な感想がほとんどを占める。たまに「教訓的な所がちょっと嫌い」というような穿った感想がみられる程度である。

こなごな島は治療空間？！

さいごに ペテッティーノは ほらあなに すんでいる

かしこいやつの ところへ いった。……

「ぼくは だれかの おぶんひんに ちがいないんだ、 どうしたら

さがし だせるの？」 ペテッティーノは さげんだ。

「こなごなしまへ いって ごらん」かしこいやつは いった。

あくるあさはやく ペテェッティーノは ちいさな ボートで
ふなでした。 そとうみの おおなみに もまれ、 びしょぬれで
くたくたになって、 かれは こなごなじまに ついた。

なんとへんな しまなんだろう！ まるで こいしの やまだ。
き いっぱん くさ いっぱん はえていない。 とにかく
いきてるものが ひとつも いない。

ペテェッティーノは のぼったり、 おりたり のぼったり、
とうとう つかれはてて けつまずき、 ころがりおちた……

そして こなごなに なってしまった！ かしこいやつは
ただしかった。 やっと ペテェッティーノにもわかった。

じぶんも みんなと おなじ ように ぶぶんひんが あつまって
できていると。 かれは げんきを とりもどして

じぶんじしんを ひろいあつめ、 たりない ぶぶんひんは
ひとつもないことを たしかめると ボートへ かけもどった。

すこしでも はやく うちへ かえろうと、 かれは
ひとばんじゅう こいだ。 ともだちが ひとりのこらず かれを
まっていた。

「ぼくは ぼくなんだ！」 かれは おおよろこびで さげんだ。

なんのことか よくわか らなかったけど ペテェッティーノが
うれしそだったから みんなも うれしかったのさ。

賢い奴をカウンセラーや治療者イメージと重ねてみることもできるが、むしろ、こなごな島を治療空間として考えると興味深い。木草一本生えていない生命を持ったものが何もない場所が癒しの空間になり得るのかという疑問をもたれる人もいるかもしれない。その島まで行くのに何時間も時間を費やすということも含めて、(かいじゅうたちのいるところの項でも触れたが)自分を発見する旅のむしろ危険性を暗示していると考えたい。転げ回りながら模索している内に主人公ペテェッティーノは、こなごなになってしまう。そうか自分も他のものと同じ部分品が集まってできているのかという洞察に到達する。「僕は僕なんだ!! insight」自分も他の奴の同じ部分品の集まった一つの独自の個体である。これに関しても、防衛をゆるめて分析・解釈

(interpretation・analysis) する事と考えると分かりやすい。すなわち分析する際に、慎重にしないとその人を壊してしまう危険性を示唆していると捉えるのである。分析（手術）は成功したが患者が死んでしまっただけではもともとでもない。自分の部分品をつまり分析された自分の部分を丁寧に拾い集めるところは、患者自ら自分自身を再構成するプロセス（徹底操作、洞察の内在化等）と考えると非常に大切な場面である。人の弱点・欠点だけを指摘していれば患者がよくなるとは常識的に考えてもあり得ないことであろう。

（3）フレデリックとその仲間達の事例

～ちょっと かわった のねずみの はなし～

うしが ぶらぶら あるいてる。うまが ばかばか はしってる。

そんな まきばにそって ふるい いしがきが あった。

なやにも サイロにも ほどちかい、そのいしがきの なか、

おしゃべり のねずみの いえ。けれど おひゃくしょうさんが

ひっこして しまったので、なやは かたむき、サイロは

からっぽ。そのうえ ふゆは ちかい。ちいさな

のねずみたちは、とうもろこしと きのみと こむぎと

わらを あつめはじめた。みんな、ひるもよるも はたらいた。

ただ フレデリックだけは べつ。

「フレデリック、どうして きみは はたらかないの？」

みんなは きいた。

「こうみえたって、はたらいているよ」と フレデリック。

「さむくて くらい ふゆの ひのために、ぼくは おひさまの

ひかりを あつめてるんだ」。

そして また、フレデリックが すわりこんで、まきばを

じっと みつめていると、みんなは きいた。

「こんどは なにしてるんだい、フレデリック？」

フレデリックは あっさり こたえた。

「いろを あつめてるのさ。ふゆは はいいろだからね」。

また あるひ、フレデリックは、はんぶん ねむっている

みたいだった。

「ゆめでも みてるのかい、フレデリック」。
みんなは、すこし はらをたてて たずねた。
「ちがうよ、ぼくは ことばを あつめてるんだ。ふゆは
ながいから、はなしの たねも つきてしまうもの」。

クライアント：フレデリック Identified Patient (IP)

主 訴：集団不適応。虚言癖？。ペテン師的行動（疑い）。

（しかし誰も困っている者がいないというのが特徴）

見立て：5匹のネズミが如何に、より豊かに生活ができるかという視点から見ていく必要があると考える。

連想する物語を聞くと先ず挙げられるのが「アリとキリギリス」(対照的な話)。「三年ねたろう」「一休さん」「寅さん」と続く。率直な感想としてペテエッティーノと異なり好き嫌いがはっきり分かれる物語である。好意的印象としては、「ネズミの可愛らしさ、親しみ易さ。心が温まる感じ。季節に当てはめている点がユニーク。色合いが素晴らしい。緑の下の力持ち・陰で支える力」というような意見が多い傾向にある。否定的印象としては、「怠け者を礼賛しているのが良くない。教育上良くない。子どもに読ませたくない。口八丁手八丁のフレデリックが嫌い。下手をすると世渡り上手。催眠術の悪用」。このような否定的な感想は、保育学科とか教育学科の学生に読み聞かせた場合に圧倒的に増える。

5匹のネズミのお仕事は……

ふゆがきて、ゆきが ふりはじめた。五ひきの ちいさな
のねずみたちは、いしのあいだの かくれがに こもった。
はじめのうちは たべものも たくさん あった。
のねずみたちは ばかな きつねや、まぬけな ねこの
はなしを しあった。みんな ぬくぬくと たのしかった。
けれど すこしずつ、きのみや くさのみは へっていった。
わらも なくなった。とうもろこしも むかしの ゆめ。
いしがきの なかは ござえそう、おしゃべりを するきにも
なれない。そのとき みんなは おもいだした。……

「きみが あつめたものは、いったい どうなったんだい、フレデリック」。みんなは たずねた。

「めを つむってごらん」。フレデリックはいった。

「きみたちに おひさまを あげよう。ほら かんじるだろう、もえるような きんいろのひかり……」四ひきの ちいさなのねずみたちは、だんだん あったかく なってきた。これは まほうかな？

「いろは？ フレデリック」。まちきれなくなって、みんなは せがんだ。

「もういちど、めを つむって」。そして フレデリックが、あおい あさがおや、きいろい むぎの なかの あかいけしや、のいちごの みどりの はっぱの ことを はなしだすと、みんなは、こころの なかに、ぬりえでも したかのように はっきりと いろんな いろを みるのだった。

「じゃあ ことばは？ フレデリック」。フレデリックは せきばらいをして、ちょっと まってから、ぶたいの うえの はいゆうみたいに シャベリはじめた。

「三がつに、だれが こおりを とかすの？ 六がつに、だれが 四つばの クローバーを そだてるの？ ゆうぐれに、だれが つきの スイッチを いれるの？ それは、そらにすんでる 四ひきの ちいさな のねずみ。ほくと きみ そっくりの、はるねずみ、ゆうだちを ふらせるかかり。なつねずみ、はなに いろを ぬるかかり。あきねずみ、くるみと こむぎの かかり。そして さいごは ふゆねずみ、ちいさな つめたい あししてる。きせつが 四つで よかったね。ひとつ へったら、どうなることか。ひとつ ふえたら どうなることか！」

おわると みんな はくしゅかつさい。

「おどろいたなあ、フレデリック。きみて しじんじゃないか！」

フレデリックは、あかくなって おじぎをした。そして、はずかしそうに いったのだ。

「そう いう わけさ」。

4匹のネズミの仕事は、来るべき冬のためにせっせと食料集めをすること。現実的にとても大事な仕事である。それに比べて、フレデリックの仕事は4匹の労働をよそに、半眼で「光、色、言葉（ポエム）」を集めるというもので、とても現実的ではないものである。しかし、一見意味がない、役に立たないものも人間が生きていく上では、特に心を豊かにするという観点から、こちらでも大事なこと“心の仕事”といってもよいかもしれない。空想、ファンタジーや夢ばかりでは生きていけないが、これらなしでも生きてはいけなくと考える。このように見てくると、異なる視点の両立ということが最終的には実現していることになり、この物語のテーマは統合・相補性（integration・complementarity）にあることは明白である。

筆者が一番感動したのは、一見何もしてないフレデリックを責めるわけでもなく切り捨てて虐めるのでもなく、他の4匹の仲間が認めているところである。ともすると怠け者、変人扱いされて仲間からシカトを受けて追放されてしまいがちな存在をフレデリックは象徴していると思われる。

（4）FreudとJungの物語

ペテュッティーノの物語は、テーマは自分探しすなわち自己同一性ego identityとするとS.Freud的もしくは自我心理学的ストーリー展開と言える。それに対して、フレデリックの方はといえば統合・相補性がメインテーマだとすると、内向・外向、アニマ・アニムスの概念を提唱したC.G.Jungのストーリー展開とみなすことができるのではないだろうか。

筆者自身はというと、ペテュッティーノの物語は「ネバーエンディングストーリー（ミヒヤエル・エンデ作）」を、フレデリックの物語は、同じ作者の「モモ」を先ず連想した。前者は、虐められっ子の少年が古本屋に逃げ込んでネバーエンディングストーリーと出会い、ファンタージェンと現実の世界とをまたにかけて、自分自身をみつめていくという物語である。

後者は、時間泥棒と盗まれた時間を人間に取り返してくれた女の子の不思議な物語である。

ある廃墟と化した円形劇場にそのモモという少女は住みついた。モモの見かけは浮浪者のごとく裸足で、髪も今まで櫛を入れたことがないかと思う程ぼさぼさである。

しかし、そんなモノの所に町のみんなはなぜか惹きつけられて通ってしまう。まるでみんなのカウンセラーのような役割を果たしているのである。このような一見厄介者のようであり、実はみんなの忘れていた何かを気づかせてくれるそんなところがフレデリックと結びついたのかもしれない。

おわりに

－自分の物語を紡ぐこと－

神話・昔話と同様に絵本の中にも、無意識の内に心理療法的な洞察を描写したものがこのように存在する。昔話や童話（絵本）は、元来口承の物語であり、人々の口から口へと受け継がれる内に、少しずつ変化をしてきたものである。その過程で多くの人の心を動かし、面白い部分だけが残し、次第に骨太の骨格を持った単純な物語になってきたと考えられる。冒頭で述べたようにユングは、こうした骨格とも言えるモチーフを、人間の心に普遍的に存在する元型的イメージの表現されたものとみなした。例えば本稿で紹介した絵本の中に『自分探し物語元型』『救世主と影との戦い元型』等々という具合に命名できるものがあるとも考えられよう。ある意味では、センダックやレオニのように名作として語り継がれている絵本の中にこそ、単純でインパクトの強い元型的イメージが生きており、さらに絵の魅力と語り手が醸し出す人間的魅力が重なり合う「絵本の読み語り」が、様々な関係性の修復・回復につながる可能性を秘めているのではないだろうか。

物語はいずれ終わりが来る。しかし、自分探しの物語が決して果てがないように、ペテュッティーノはどのように生きていくのか。フレデリックとその仲間たちは冬を越せたのであろうか。物語の続きは自分なりに考えて行くと面白いかもしれない。なぜならば、他の人の固有の物語を共感できる感性を養うことに役立つように思うからである。そして何よりも、自分だけの固有の物語を自分なりに紡いでいくことが生きるといふことのように今のところ感じているからなのである。

心理療法において、クライアントが自分の物語を発見し、それが癒しへとつながった時、心理療法は終結し物語は終わる。しかし、山口（2001）が指摘するように「人が生き続けるということは、絶えず紡がれる未来の物語に

開かれ続けるということである。心理療法という物語が終わる時、発見された物語の解体が始まり、新たな物語がすでに始まっていることを忘れてはならないだろう」という言葉は、心理療法（臨床心理士）の専門家として今後も肝に銘じたい大切な警告と考える。

【文 献】

- アンリ・エレンベルガー（1970）木村敏・中井久夫監訳：無意識の発見
一力動精神医学発達史 上・下 弘文堂
- 土居健郎（1977）：方法としての面接 ―臨床家のために― 医学書院
- 河合隼雄・松井直・柳田邦男著（2001）：絵本の力 岩波書店
- 河合隼雄（2001）：総論「物語る」ことの意義. 講座心理療法
心理療法と物語 岩波書店 1-19
- レオ＝レオニ（1967）谷川俊太郎訳（1969）：フレデリック 好学社
- レオ＝レオニ（1968）谷川俊太郎訳（1975）：ペテュッティノー 好学社
- 松瀬喜治・八尋華那雄・空井健三他（1988）：抜毛症男児とその母親に対する心理治療過程
中京大学文学部紀要 第23巻2号 1-20
- 松瀬喜治（1989）：死にまつわる強迫症状に悩む青年の心理治療過程
心理臨床学研究 第7巻2号 27-38
- 松瀬喜治（1990）：ロールシャッハ・テストの治療的適用についての一考察
ロールシャッハ研究 第32号 1-20
- 松瀬喜治（1999）：なぐり描き法の病理指標の有効性について
―妄想型精神分裂病者への適用― 日本芸術療法学会誌 第30巻1号 46-59
- Maurice Sendak（1963）：*WHERE THE WILD THINGS ARE*. Harper&Row, Publishers, Inc., New York.（神宮輝夫訳（1975）：かいじゅうたちのいるところ 富山房）
- ミヒヤエル・エンデ（1973）大島かおり訳（1976）：モモ 岩波書店
- ミヒヤエル・エンデ（1979）上田真而子・佐藤真理子訳（1982）：はてしない物語
岩波書店
- 空井健三（1991）：臨床心理学的に読む 児童文学世界 中教出版 51-64
- 山口素子（2001）：心理療法における自分の物語の発見について
講座心理療法 心理療法と物語 岩波書店 113-151

